告白7

大内顕
元警視庁職員
不正を公表しないで
死ぬのはおもしろくない。

大内顕（おおうちあきら）元警視庁職員

１９５８年４月21日、東京都葛飾区生まれ。１９８２年、中央大学法学部法律学科を卒業し、警視庁職員となる。本田署、第８方面本部、北沢署、東大和署などで会計を担当。１９９７年２月、警備部警備第１課へ異動し、機動隊旅費を原資とする年間12億円の裏ガネづくりに携わる。２０００年10月、警視庁退職。著書に『警視庁裏ガネ担当』（講談社）など。

警察官はみんな〝家族〟だから、プライバシーはない

――大内さんは２０００年10月まで一般職員として警視庁に勤務していましたが、一般職員とは、警察官とは違うのですよね。

大内　一般職員とは、建築や電気、通訳などの専門職員と、それ以外の事務職員のことです。すべての都道府県警に、警察官以外の一般職員がおり、警視庁では約４万３０００人の警察官以外に、約２８００人の一般職員が勤務しています。このうち８割が事務職員で、私も事務職員として勤務していました。

私は１９８２年に警視庁に採用されました。当時は、警視庁の事務職員は、東京都人事委員会が実施する東京都の行政職職員採用試験で採用されていました。合格者は成績や希望によって、都庁、警視庁、東京消防庁、学校などで採用されるのですが、私は成績が振るわなかったため、第１希望の都庁ではなく第２希望の警視庁に就職することになりました。

――警察の事務職員はどんな仕事を担当するのですか。

大内　警視庁本部と警察署で多少違いますが、基本的には会計担当ですね。

警察署の場合は、配付される予算に関する実務と、車庫証明や道路使用許可の手数料収入の管理などを行います。ほかには、遺失物管理や署員の福利厚生なども会計担当者の仕事です。

本部の場合は、例えば刑事部では「刑事総務課」というように、各部の筆頭課が予算担当として、警察署の会計担当者と同じような仕事をこなします。捜査第1～4課など、刑事部のほかの課は、各課に必ず1人はいる会計担当者が、筆頭課に予算を要求し、配分してもらいます。

この会計業務のなかの大きな割合を占めるのが、偽造領収書や水増し請求などによる裏ガネの捻出です。

――元警視庁職員として、映画『ポチの告白』をどうご覧になりましたか。

大内　映画としてはすごく楽しめました。3時間以上の映画だと聞いていたので、サンプルDVDを何度かに分けて見るつもりで、夜中の1時から見はじめたのですが、途中でやめられなくて最後まで一気に見てしまいました。

ただ、私が見てきた警察内部の実態と比較すると、かなり大げさに描かれているような気はします。例えば、「我々は〝家族〟なんだから」というせりふ。確かに、「家族」という言葉は警視庁にいたころは何度も聞きました。でも、「家族」の名のもとに麻薬密売の手助けをしたり、不正に肉薄したジャーナリストをボコボコにしたりしていて、現実よりはずいぶんやりすぎている感がありますね。

実際には、警察官個人のプライバシーに立ち入るときの免罪符として「家族」という言葉が使われていました。警察というのは、必要以上にプライベートなところまで干渉する職場なんです。私が採用されたばかりのころは、新しく採用さ

警察バーで、三枝刑事課長はタケハチに「我々は〝家族〟なんだから」と諭す。